

納戸は聖なる空間「シラ」のことである

前田速夫は、その著「白の民俗学へ・・・白山信仰の謎を追って」（2006年7月、河出書房）において、納戸について以下のように述べている。

谷川健一は、本土でも南島でもシラの稲作儀礼が見られないと言ったが、本土では姿を変えてしっかり残っている。というのは、家の一番奥の日の差さない部屋は、ふつう納戸と呼ばれているが、ここはふだんは夫婦の寝室であったり、産屋であったり、奥の神聖なる空間であった。その納戸は、暮れから新年にかけては歳徳（としとこ）の神、すなわち稲霊が祀られていた。この納戸に祀られる神については、石塚尊俊の「納戸神に始まって」が詳しい。石塚が最初に注意を促すのは、[「大歳の客」という山陰地方で最近まで語られていた有名な昔話](#)である。それは次のようなものである。

大みそかの日、百姓の家の姑が素生素直で信心深い嫁にいろいろの火を絶やさないようによく返している。嫁は心配して夜中に火をかきまぜに行くと消えてしまっている。どうしようと思っているが、近所は皆夜静まっている。困って歩いていると、川向こうにたき火がみえる。そこで火をもらおうと思っていくとひげ面の雲助が火にあたっている。「火種をくれ。」とたのむと、承知するが、「かわりにいうことをきいてくれ」という。火さえもらえれば、という「仲間の一人が死んで困っている。三日間だけ棺桶をあずかってくれ」という。しかたなく棺桶を背中に負って帰り、納屋の二階の藁の中にかくしておく。ところが、夜があげてみると、人はおらず、ただ棺桶だけが昨夜のままに置かれている。不思議に思って蓋を取ってみると、中は死体と思いきや、なんと大判小判がいっぱい詰まっている。それでその家は大金持ちになった。

つまり、山陰地方では、正月になると納戸に棺桶を模した歳桶を祀る風習があるという訳なのだが、こうして正月早々、死にまつわることを平気で説く、というより積極的に語ろうとするところに、「現代の感覚を以てしては測り知れない、失われた遠い過去の信仰が淀んでおり、それはもしかしたら歳神信仰の本質を解く鍵になるのではないか」と考えた石塚尊俊は、結局、次のように結論する。

正月11日田打ちの日には納戸から田へde、10月亥の子農事の終わる日になると再び元の納戸に帰るトシトコの神は田と家を往来する田の神であって、それを家の奥まった納戸に祀るのは、古代からの冬籠りの信仰、すなわち、魂（この場合は稲霊）が春になって力強い働きをするためには、その前に暗い狭いところに籠っていなければならない。忌み籠もりとする信仰の残影であって、その祭壇は疲れ果てた稲魂をもう一度蘇らせる、あるいはそれからさらに新しい魂を誕生させるための産屋（シラ）であった。

要するに、古い時代の人たちは、人間に魂がある以上、生きとし生けるものにはみな魂がある。それは動物のみならず植物にもある。穀物にもむろんある。あるからこそ生育くし、稔りを見る。けれども、その魂は不変ではない。人間がそうであるように、時がたてばやがて老朽化する。その時とは即ち役目を果たした時であり、稲の場合では収穫を終えた時がそれだ。だからそういう時、これをそのまま放置しておいたのでは来年の稔りがおぼつかない。そこでこれを産屋に入れ、あたかも人間がするのと同じように身籠らせ、それによって次代の魂を誕生させねばならぬ。稲積みはそのための産屋であった。だからこそこれを人間の産屋と同じシラという語で呼んだ。ということは、これを逆に言うと、納戸部屋が夫婦の寝間であり、産室なのは、稲の産屋に等しいのである。稲の産屋、シラが、人間の誕生や再生も意味した訳は、これで了解できる。

前田速夫の指摘は以上の通りである。納戸は聖なる空間「シラ」のことなのである。さて、このような聖なる空間「シラ」を現在の思想と繋げて理解するためには、どのような言葉で呼べば良いのであろうか？ 言葉というものは、それを聞いた時にどのような意味を持ったものであるかが理解できないといけない。そういう点で言うと、「シラ」と言ってみたところで一般の人には何とことか判らない。現代のどのような思想を繋がっているのかが判らない。したがって、私は、現在の思想との関係で、納戸「しら」のような聖なる空間をどのような言葉で言い換えればいいのか考えてみた。

私は、[山地拠点都市構想（前編）という論文の第3章第1節に「奥の思想」](#)について書いた。それに基づいて、「奥の思想」との関係から納戸「しら」のような聖なる空間は「**奥の空間**」と呼びたいと思う。山地拠点都市構想（前編）という論文の第3章第1節に書いた「奥の思想」についての要点は次の通りである。すなわち、

- 1、「奥」の空間というのは、ひとつの「**シニフィエ**」であって、「**自然の霊力**」というか「**宇宙の不思議な力**」を感じることでできる特殊な空間である。つまり、「奥」の空間というのは、「**宇宙の原理**」というか「**自然の原理**」の働く空間のことである。
- 2、「奥」には**神霊や靈魂が宿る**という思考をみることができる。
- 3、古来日本人の神聖な秩序観念には、日常的なコスモロジーの中心を人工的な生活世界の中央に見える形で求めるのではなく、むしろ生活世界の「奥」ないし「源」とも言える周縁的に隠れた形に求めるという傾向が強いのである。そのことは、たとえば国語学の**阪倉篤義**など近年の**カミ**の語源論の成果にみるように、**日本語のカミには本来的に水源**

の山谷にひそむ隠れた生命的靈性を指す意味がある。偶像など形を見せぬ神靈は、豊かで清浄なカムナビ（神山）やモリ（杜）、ヒモロギ（神樹）やイワクラ（神石）などをヨリシロ（憑代）にして宿る精霊であって、里宮である神社も普段は深い鎮守の森こそが祭神が奥深く鎮まることを暗示する。

4、奥の深いものは見せれない。「間」において、観客には奥深いものを感じて貰うしかない。その感じ方は、観客次第だが、その自由な感じ方が、面白いのだし、花のように素晴らしい。奥は「穴」の奥でもある。日本人は「穴」の奥に「ある」というもの、すなわち神を感じることができる。

5、「間」の観念というのは、どうやら縄文時代から続いてきて、世阿弥によって完成されたもののようだ。（秘すれば花。秘すれば花なり秘せずは花なるべからず。）

6、縄文人が人工的に作り出す音はいかにも低調であった。いわば縄文人は、自ら発する音を自然の音の中に控えめに忍び込ませはするが、あえて個性を強く主張したり際立たせようとはしなかった。

7、大事なことは、「間」の思想である。縄文人がそうであったように、自ら発する音を自然の音の中に控えめに忍び込ませはするが、あえて個性を強く主張したり際立たせようとしてはならないということだ。

山地拠点都市構想（前編）という論文の第3章第1節に書いた「奥の思想」についての要点は以上の通りであるが、私が「奥の思想」との関係から納戸「しら」のような聖なる空間は「奥の空間」と呼ぶ理由をご理解いただけるであろうか。

一般的には、「奥」という言葉は、部屋の中でもっとも尊いところとされ、昔は、そこに神を祭った。奥座敷や寝室などを「奥」と言っているが、私は、それを拡大解釈して、「シラ」と呼ばれる空間も「奥」と呼びたいのである。私は、日常的な「ケ」の空間から非日常的な「ハレ」の空間に入ることによって祭りが行われる、と考えるのである。